

オポナカムラ 彩発見!!

オポナカムラは古代語で「大中村」の意。
 国指定史跡「大中遺跡」の最新の調査をもとに、様々な観点から
 ふるさとの誇れる遺跡について考えてみたいと思います。

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079(435)5000



播磨町マスコットキャラクター
いせきくん、やよいちゃん

新しい竪穴住居



8 大中遺跡は弥生時代の住宅展示場

大中遺跡では、これまでに23回調査が行われ、80棟以上の住居跡が見つかっています。遺跡(1900年前から約150年間)には、少なくとも25軒くらいの家が建てられ、同時期に20軒から25軒くらいの家があったようです。

大中遺跡の住居は、最初のころ、地面を丸く掘った形でしたが、しだいに正方形や長方形の形が増えていきました。また、ほとんどの家の柱は4本ですが、九州から伝わったのでしょうか、2本の柱で立てられた小さな長方形の家もみつかっています。さらに、五角形や六角形の大きな家の跡も出てくるなど、「オポナカムラ(大中遺跡のムラ)」は、「住宅展示場」と呼べるくらい様々な形の家が立っていました。家は、50センチ〜1メートル程度の地面に4本の太い柱を立て、その上にかぶせるように屋根をかけた「竪穴住居」でした。柱は、近くに生えているアベマキやコナラを使い、屋根は、川や池に生えているススキなどのカヤで葺いています。また、掘った土は、水や風が入らないようまわりに積み上げ、家の真ん中には火が焚けるよう炉がつくられていました。遺跡の1101

号住居は、床面が29平方メートル(約18畳)あり、広いリビングルームくらいの大きさです。家の中に入ると、ゆったりと寝られる広さです。家の中に入ると、夏は涼しく、冬は温かく感じ、見た目より住みやすいといえます。さらに、大中遺跡のもう一つの特色として、床面の周囲が一段高くなっている「ベッド状遺構」があります。そこでは、5〜6人の家族がおしゃべりをしたり、寝起きをしていたようです。家の中は薄暗く感じますが、火を焚いてまわりに集まり、みんなで狩りや収穫の話をしていたのかもしれない。

最近、竪穴住居の研究が進み、大中遺跡にも新しいタイプの住居が復元されました(写真)。住居の中に入ってみると、その違いがよくわかるので、まだの方は、一度見学に来てください。簡単な造りの竪穴住居ですが、家の中に炉をつくって、調理をしたり暖をとったりすることでカヤが乾燥され、煙で虫がいぶされて防虫効果があるなど、カヤと家を長持ちさせる工夫がありました。竪穴住居のシンブルさが、縄文時代から飛鳥時代まで使われ続けた理由かもしれません。

町の人口 10月1日現在

34,182人(-38人)

(住民基本台帳人口+外国籍人口)

男...16,782人(-14人)

女...17,400人(-24人)

世帯数...13,627(-1)

